

Title	『老子』のテキストの変遷に関する一考察：「吾」と「我」を中心に
Sub Title	A study of "Laozi" text : focused on "吾" and "我"
Author	仙石, 航太郎(Sengoku, Kōtarō)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2014
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.107, (2014. 12) ,p.104 (189)- 120 (173)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01070001-0104">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01070001-0104</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 『老子』のテキストの変遷に関する一考察

～「吾」と「我」を中心に～

仙石 航太郎

目次	第一章 郭店本『老子』成立に関する先行研究
	第二章 「吾」「我」字の用法に関する先行研究
	第三章 「吾」「我」字のみえる諸章の検討
	第一節 郭店本に該当章が含まれている章の検討
	第二節 郭店本に該当章が含まれていない章の検討
	第三節 『老子』にみえる「吾」「我」字の考察結果
	第四章 「吾」「我」字からみる『老子』形成に関する一考察

本論文の目的は『老子』のテキストに見られる「吾」「我」字の用法・指示内容を考察することにより、『老子』の著者像及び『老子』テキストの形成過程を明らかにすることである。『老子』の研究書や論文は現在に至るまでに数え切れないほどのものが出ているが、近年『老子』研究の状況は著しい変化を遂げている。一九九三年、中国湖北省荆門市郭店村の一号楚墓（以下、郭店楚墓と表記する）から出土した八〇〇余枚の竹簡の中に、現行本『老子』の原型とみられるテキスト（以下、郭店本『老子』と表記する）が含まれていたことがその要因である。まずは、この郭店本『老子』に関する問題から見ていきたい。

## 第一章 郭店本『老子』成立に関する先行研究

郭店本『老子』の成立に関する説は、二つのタイプに大別される。すな

わち、郭店楚墓の造営年代を戦国中期の後半、前三〇〇年頃と推定し、郭店本『老子』もその頃までにはある程度の形として出来上がっていたとするものと、郭店楚墓の成立年代をそれより後の前二六〇年前後とし、郭店本『老子』の成立もその頃とするものである。

まず、第一の説であるが、この説の論拠となるのは副葬品による年代測定と『史記』の記述である。浅野裕一氏は『諸子百家〈再発見〉』において「郭店一号楚墓は春秋・戦国時代の楚の都・郢の紀南城の北方九キロのところであり、辺り一帯は楚の貴族の墓陵地だった場所で、多くの墓が密集している。そこで郭店一号楚墓の墓主も楚の貴族だったと推定できるのだが、副葬品の中に墓主や下葬年代を特定できる直接的手がかりは発見できなかった。しかし、中国の考古学者は、さまざまな副葬品の様式変化に基づく編年から、その造営時期を戦国中期（前三四二～前二八二年）の後半、前三〇〇年頃と推定した。この推定は一九八六年から一九八七年にかけて発掘調査され、副葬品の紀年資料から前三一六年の造営であることが確認された湖北省荆門市の包山二号楚墓を始め、江陵周辺の多くの楚墓から出土した副葬品の分析から得られた編年によるものである。」と述べている<sup>i</sup>。また、『史記』白起王翦列伝の「其の明年楚を攻め、郢を抜きて夷陵を焼く。遂に東のかた竟陵に至る。楚王は亡げて郢を去り、東に走りて陳に徙る。秦は郢を以て南郡と為す。」という記述に基づき、郭店楚墓の造営時期の下限を前二七八年に置いている。そして、これらの資料から郭店楚墓の造営年代をおよそ前三〇〇年頃と推定し、郭店本『老子』も前三〇〇年頃には既にできており、その成立は遅くとも前二七八年を下ることはないとしている。

以上が第一の説の概要であるが、池田知久氏はこれに真っ向から反対している<sup>ii</sup>。池田氏はまず、郭店本『老子』と同時に出土した「窮達以時」というテキストに『荀子』の「天人之分」と似た思想がみられることに注目する。そして「天人之分」の思想は荀子が斉の稷下で荘子学派と接触することにより、「天人関係」思想から影響を受けながらも、「人」の否定を覆して「人」の肯定に転じた事で形成したものであり、『荀子』天論篇は荀子

が齊にいた前二六五年か前二六四年から前二五五年までの約十年間に書かれたものであるとする。よって、「窮達以時」はこれが世に出た後、その影響下で荀子学派の書いたものであるとして、郭店楚墓の下葬年代は前二六五年前後から前二五五年よりやや後だと推測する。

以上のように、郭店本『老子』の成立には様々な説が行われているが、いずれにしても、郭店本と現行本との間にテキストとして多くの相違点があることは認めざるを得ないため、郭店本『老子』のテキストから、現行本に至るまでに何らかの整理編集及び添削が行われ、現行本『老子』の体裁として定着したことは、どの論者も一様に説くところである。郭店本『老子』のテキストを検討する際にはこのことをふまえ、現行本と異なる点については、諸本との異同を検討しつつ、基本的には郭店本『老子』のテキストをより古い、原『老子』に近いものとみなし、考察していくこととする。

## 第二章 「吾」「我」字の用法に関する先行研究

次に、「吾」と「我」字の違いに関する先行研究を簡単に見ていきたい。まず、両者の違いは格によるものとする説がある。馬忠建氏、胡適氏、カールグレン氏などがこの説の代表者として挙げられる。細かな点で三者の主張は異なるが、通常、主格・修飾格には「吾」が用いられ、目的格には「我」が用いられる、という点では共通する。しかし、格だけで両者の用法を説明しようとするには例外があまりにも多く、不十分であると思われる。そこで、高倉克己氏は、「吾我篇」において馬建忠氏、胡適氏、カールグレン氏の説を取り上げた後、格による区別に疑問を投げかけ、「発言者自身の立場の表示と、自己を指し示していることばとが分離していないままで、混然としたのが「吾」であり、明かに自分を指している方が「我」である」という仮定をたてている<sup>iii</sup>。「吾」を用いる時は自分というものを明らかに取り出して言っているのではなく、対して「我」を用いる時ははっきりと自分というものを意識しているというのである。ここから、「吾」が目的格に用いられないというのは、格による区別ではなく、話者の立場からと

いう吾の一方的な方向づけを考えれば当然のことだとする。同様に、鈴木直治氏も「[我][吾]について」<sup>iv</sup>で、漢語が相手に心情を伝えることを重んじていることなどから、「我」「吾」も重点の伝達を強く求めることから発達してきたものであり、話し手が強く自分を指示しようとする場合には「我」を用い、然らざる場合には、「吾」を用いるようになっていたものとしている。

以上の先行研究の内容をまとめてみると、「吾」と「我」の区別については、それを格による使い分けだと考える者も、そうでない者も、理由はどうあれ結果として主語の位置では、「吾」「我」の両方が用いられるが、目的語の位置は基本的に「我」のみである（ただし馬忠建氏などの指摘しているように否定語を伴って目的語が動詞の前に移った時は「吾」を使う場合もある）ということは認めている。これだけを見れば格の違いによるもののように見えるが、それだけでは説明できない部分も多くあるので、次に発話者の意識が問題となる。すなわち、自分を指し示す意識が強くない場合には「吾」を用い、はっきりと自分を意識して使う、自他の区別をはっきりと示したりする場合には「我」を使う、というものである。「吾」と「我」の用法の違いは概ねこの二点に帰せられるということになる。次章では、この相違点を念頭において「吾」「我」字のみえる章の検討を行っていく。

### 第三章 「吾」「我」字のみえる諸章の検討

『老子』中に「我」「吾」の字のみえる章は十九章ある。紙幅の都合上全ての章を詳細に検討することはできないので、本論の内容上特に重要と思われる異同が見られる十七章・二十章・三十七章・四十九章のみを詳細に検討し、他の章は参考として本文を載せるに留め、必要があれば適宜触れていくこととする。また、本文も全文は載せず「吾」「我」に関する箇所のみを載せる。論の都合上、郭店本に含まれる章と含まれない章とに分けて論を進めていく。郭店本の底本には『郭店楚墓竹簡』（文物出版社 一九九八）を用い、同書に収める裘錫圭氏の釈文及び『郭店楚簡老子の新研究』

の池田氏の釈文を参考とし、通行の字体に改めて引用した。帛書本は『馬王堆漢墓帛書』（文物出版社一九八〇）を底本とし、池田知久『馬王堆出土文獻叢書老子』も参考にしながら、通行の字体に改めて引用した。王弼本の底本には『和刻本諸子大成』第九輯（汲古書院一九九六）所収の宇佐見瀧水考訂『老子道德真經』を用いた。また、郭店本において残欠のある箇所は、池田知久『郭店楚簡老子の新研究』を参考にして〔 〕内に推測して補った。

### 第一節 郭店本に該当章が含まれている章の検討

まずは内容上重要と思われる十七章・二十章・三十七章について詳しく検討し、その後残りの「吾」「我」の見られる章の本文を参考として載せ、郭店本の特徴を明らかにする。

#### ○十七章

（王弼本）悠兮其貴言、功成事遂、百姓皆謂**我**自然。

（郭店本）猶乎其遺言也、成事遂功、而百姓曰**我**自然。

この章の「百姓皆謂我自然」の句の解釈には「百姓皆我を自然と謂う」と読んで「我」を『老子』の著者とする説と、「百姓皆我は自然なりと謂う」と読み「我」を百姓とする説の二つがある。この点は「我」の性質を考える上で重要であるので、詳しく考察したい。

まず注目すべきは、王弼本では「謂」であるところが、郭店本では「曰」となっている点である。では、この両者に違いはあるのだろうか。この点を明らかにするため、『老子』中での「謂」と「曰」の用法について触れておく。

『老子』中に現れる「謂」「曰」は、「～謂（曰）…」の形で、「～を…という」という用法が、全体のおよそ三分の二を占める。また、この際、「謂」は必ず「是謂…（是れを…と謂う）」の形で使われるが、「曰」はそのままには使われず、十六章の「歸根曰靜（根に歸るを靜と曰う）」「復命曰常（命に復るを常と曰う）」「知常曰明（常を知るを明と曰う）」のように、「曰」の前には動詞＋目的語の句がくる。十四章や二十五章にも同様の用法がみ

られる。「～を…という」式の用法において、代名詞「是」が前にくる時には「謂」を使い、動詞+目的語の句がくる時には「曰」を使うという法則には一つの例外もない。他にも、「曰」は「是以建言有之曰（是を以て建言に之有りて曰く）」（四十一章）のように用いられ、ある言葉を引用する際には必ず「曰」を使い「謂」を使わないのも、決定的な違いである。

以上のことから、少なくとも『老子』においては「謂」と「曰」とは明確に使い分けられていると言える。これを確認したうえで、実際に本章と関係のある用例を見ていきたい。

まず、注目すべきは六十七章の「天下皆謂我大似不肖（天下皆我を大にして不肖と謂う）」であり、本章と文の構造が非常に近い。ここでの「我」は文脈上、天下の人々と取ることは不可能であり、確実に著者の一人称である。このような「謂～…（～を…と謂う）」の形の用法は他にもいくつか見られる。例えば、一章の「同謂之玄（同に之を玄と謂う）」、五十五章の「謂之不道（之を不道と謂う）」がそれである。このように「謂」は「謂～…（～を…と謂う）」の形で用いられるが、対して『老子』中の「曰」にはこのような用法がない。しかし、「曰」にはその代わりに、前述のような引用の例に顕著であるが、比較的長い文を後ろに続けることができる。「謂」にはその用法が無い。ただし、例外として、三十九章に「侯王自謂孤寡不穀（侯王自ら孤寡不穀と謂う）」という句がある。これは「侯王は自身を孤寡不穀と言った」という意であり、侯王の言の引用が「謂」でなされている。これまでの例を考えれば、「曰」の方が正しいと思われるが、この「謂」には異同が多く、「曰」や「称」に作るものもあり、また多くの学者が「自称」を是としている<sup>v</sup>。このことから、「称」もしくは「曰」に作る方が自然であると考えられていたことが分かる。

以上のことを踏まえて再度「百姓皆謂我自然」「百姓曰我自然」の意味を考えてみるに、「謂」には直接言葉を引用する用法は無く、「我は自然なり」というような文の形が続くのは不自然であるから、我を目的語ととって「百姓皆我を自然と謂う」と読むのが自然であろう。一方、「曰」の場合は、後ろに目的語を取るような用法はなく、他人の言を引用する際に用い

られるから、「百姓曰く、我は自然なり」と読むのが自然だということになる。

つまり、郭店本の時点では「我」は百姓を指していたのだが、テキストの変遷の過程で「曰」が「謂」に変わってしまった影響で、作者の一人称ととれるようになってしまったと言える。この改変が意図的なものかどうかは決し難いが、少なくともはじめの段階では、作者が自分を指して「我」を使ったのでは無いことが分かる。

### ○二十章

(王弼本) 絶學無憂。唯之與阿、相去幾何。善之與惡、相去何若。人之所畏、不可不畏。荒兮其未央哉。衆人熙熙、如享太牢、如春登臺。**我**獨泊兮其未兆、如嬰兒之未孩、僂僂兮若無所歸。衆人皆有餘、而**我**獨若遺。**我**愚人之心也哉、沌沌兮。俗人昭昭、**我**獨若昏。俗人察察、**我**獨悶悶。澹兮其若海、颺兮若無止。衆人皆有以、而**我**獨頑似鄙。**我**獨異於人、而貴食母。

(郭店本) 絶學無憂。唯与訶、相去幾何。美与惡、相去何若。人之所畏、亦不可以不畏。

郭店本では「荒兮其未央哉」までの上段しかなく、各種今本の「我」字を含む部分は全く無い。上段で「人之所畏、不可不畏」と言っているのに、以下で衆人との相違を極端までに強調している点など、前後の文の繋がりは良くなく、また、『淮南子』道応篇・『文子』道原篇に引用する文は上段のみでそれ以後を全く含まないことから、今本のこの部分は後次的に付加されたものと考えられる(池田知久『郭店楚簡老子の新研究』<sup>vi</sup>)。

この後半部分では衆人・俗人と異なる「我」が強調されている。これらの「我」は「我獨」という表現などからも明らかに自他の区別を意識しており、いずれも主語であるが、第二章で見た法則に則って「我」字が使われている。この自分を強く意識した「我」の含まれる部分が郭店本には無く、後の付加によるものだと思われることは、郭店本の性質を考える上で非常に重要である。この点はまた後に触れる。

### ○三十七章

(王弼本) 道常無爲而無不爲。侯王若能守之、萬物將自化。化而欲作、



吾將鎮之以無名之樸。無名之樸、夫亦將無欲。

(郭店本) 道恆無爲也。侯王能守之、而萬物將自爲。爲而欲作、將定之以無名之樸、夫亦將知足。

この章、郭店本では「吾」字が無くなっている。帛書甲本はこの部分欠字でわからないが、郭店本以外の各種版本は全て「吾」字がある。もし「吾」があれば、後ろの「將鎮之以無名之樸」の主語は無論「吾」であるが、「吾」が無ければ、直前の文の主語である「侯王」が引き続き主語となる。前者の場合、「吾」すなわち『老子』の著者は天下を治める為政者としての道に通暁した人物だという意識が働いている。だが、後者であれば「侯王」ならばこのようにやるだろう、というような文意となり、自らについては何らの示唆もない。このように、「吾」の有無は内容の上でも重要な違いを生ずる。このことは、後で詳しく述べることとなるが、おそらく『老子』の形成過程で「吾」という形で老子（すなわち『老子』の著者）を文面に出していくことによって、老子を理想的な道、国を統治する術を体得した人物として権威づけようとしたのだと思われる。

以下、郭店本に見られる残りの章の本文を参考として載せる。

○十三章

(王弼本) 吾所以有大患者、爲吾有身。及吾無身、吾有何患。

(郭店本) 吾所以有大患者、爲吾有身。及吾無身、或何 [患]。

○十六章

(王弼本) 致虛極、守靜篤、萬物竝作、吾以觀復。

(郭店本) 致虛極也、守盅篤也、萬物旁作、居以須復也。

○二十五章

(王弼本) 吾不知其名、字之曰道、強爲之名曰大。

(郭店本) 未知其名、字之曰道、吾強爲之名曰大。

○五十四章

(王弼本) 吾何以知天下然哉、以此。

(郭店本) 吾何以知天 [下之然哉、以此]。

○五十七章

(王弼本) 吾何以知其然哉、以此。天下多忌諱、而民彌貧。民多利器、國家滋昏。人多伎巧、奇物滋起。法令滋彰、盜賊多有。故聖人云、**我**無爲、而民自化、**我好**靜、而民自正、**我**無事、而民自富、**我**無欲、而民自樸。

(郭店本) 吾何以知其然也。夫天多忌諱、而民彌貧。民多利器、而邦滋昏。人多智、而奇物滋起。法物滋彰、盜賊多有。是以聖人之言曰、**我**無事、而民自富。**我**無爲、而民自爲。**我好**靜、而民自正。**我**欲不欲、而民自樸。

では、これらの考察から、郭店本のどのような性質が見えてくるだろうか。

まず、これら八章のうち、十六章・二十章・三十七章については、諸本に見られた「吾」「我」の字が郭店本には見られない。十六章は「吾」の有無によって内容上に重要な違いは生じないが、二十章と三十七章の異同は重要である。二十章の場合、執拗なまでに他とは異なる自己を強調する「我」が語られる部分が郭店本では見られない。また、三十七章の場合は、郭店本には「吾」の字が見えず、郭店本以外の諸本では「吾」を付加することによって、「吾 (=老子)」が天下を治める術を体得した人物であるとの印象が強まる。

次に、「吾」「我」の内容についてみてみると、「吾」は広く「自分」という意味のものと、軽い一人称のものが半々である。一方、「我」は郭店本には見られない十六章の例を除けば全てが発話のなかに現れ、それぞれ百姓・聖人の一人称であって作者の一人称ではない。十七章の場合は、テキストの変遷の上で、「我」の示す内容があたかも作者である老子自身であるかのように変わってしまっているが、郭店本の段階では、老子を指すものではない。五十七章での「我」も民との対比の上で「為政者としての私」という衆人と異なる私が強調されているが、聖人の一人称であって、老子の一人称ではない。

このように、もともと郭店本『老子』にあっては作者の像がうかがえるような一人称としての「吾」「我」は一例も見えないが、現行本のテキストでは作者の像、すなわち為政者としての姿や他者とは異なる孤独な姿が垣

間見られるような改変のなされている例が少なくない。この点は第四章で詳しく触れることになるであろう。

## 第二節 郭店本に該当章が含まれていない章の検討

次に、郭店本には該当章が含まれていない章の検討をおこなっていく。帛書本との間に重要な異同のある四十九章のみ詳細な検討を加え、残りの章は本文を載せるに留める。

### ○四十九章

(王弼本) 聖人無常心、以百姓心爲心。善者吾善之、不善者吾亦善之、徳善。信者吾信之、不信者吾亦信之。徳信。

(帛書本) 聖人恆無心。以百姓之心爲心。善者善之、不善者亦善之。得善也。信者信之、不信者亦信之。得信也。

この章は、王弼本に見られる四度の「吾」が、帛書本ではことごとく無い。この「吾」の有無によって内容上どのような違いが生じるかを考えてみたい。

まず、帛書本のように「吾」が無い場合、「善者善之、不善者亦善之。得善也。信者信之、不信者亦信之。得信」の句の主語は全て聖人となることは間違いない。よって、この章は全体を通して聖人のあり方を論じた章であると言える。一方、王弼本のように「吾」が含まれると、一概にそうとは言えなくなる。木村英一氏は『老子の新研究』で「この文は、最初の二句と、終りの「聖人在天下…」以下とは、聖人の百姓に対する態度を説いたもので、そのうちの「百姓皆注其耳目」一句以外は、すべて「聖人」が主語になつてゐる。しかし中間の「善者吾善之、不善者吾亦善之、徳善。信者吾信之、不信者吾亦信之。徳信」は、少なくとも「徳善」・「徳信」以外の四句はすべて「吾」を主語とする言葉で、前後の文と趣を異にしてゐる。これについては、「吾」は単なる一人称の代名詞ではなく、「聖人自身」といふ三人称的な意味と見て、前後の文と一貫させて解することも不可能ではないが、しかし平心に見て「吾」はやはり一人称と見るのが自然であり、従つてこの四句は、聖人の言葉を取り来つて嵌入したもの

と解するほうがよいであらう。そして「徳善」・「徳信」の二句は、この聖人の言葉を伝誦した人が附加した敷衍の言葉と見られるであらう」と言っている<sup>vii</sup>。要するに、「吾」があるテキストでは、「吾」を聖人の言における一人称として解釈することも不可能ではないということだが、普通引用をする際には「聖人云」などの引用であることを示す句が置かれるはずであるから、やはり不自然の感は免れえない。しかし、「吾」が無いテキストであれば、「善之」「信之」の主語はいずれも間違いなく聖人であり、通りのよい文章となる。

以上のように、私は「吾」の無い帛書本のテキストこそが本来の『老子』のかたちであり、「吾」字は後人の附加によるものであらうと考える。ではなぜわざわざ「吾」を加えたかといえ、**「吾」**すなわち作者としての老子に聖人としての性格を付与したかったためにほかならないと思う。この点については、のちに詳しく述べる。

以下、残りの章の本文を王弼本に基づき載せる。

○四章 吾不知誰之子、象帝之先。

○二十一章 吾何以知衆甫之狀哉、以此。

○二十九章 將欲取天下而爲之、吾見其不得已。

○四十二章 人之所教、**我**亦教之。強梁者不得其死。吾將以爲教父。

○四十三章 吾是以知無爲之有益。

○五十三章 使**我**介然有知、行於大道、唯施是畏。

○六十七章 天下皆謂、**我**道大似不肖。夫唯大、故似不肖。若肖、久矣其細也夫。**我**有三寶、持而保之。

○六十九章 用兵有言、吾不敢爲主而爲客、不敢進寸而退尺。是謂行無行、攘無臂、扔無敵、執無兵。禍莫大於輕敵、輕敵幾喪**吾**寶。

○七十章 吾言甚易知、甚易行、天下莫能知、莫能行。言有宗、事有君。夫唯無知、是以不**我**知。知**我**者希、則**我**者貴。是以聖人被褐懷玉。

○七十四章 民不畏死、奈何以死懼之。若使民常畏死、而爲奇者、吾得執而殺之、孰敢。

### 第三節 『老子』にみえる「吾」「我」字の考察結果

以上の「吾」「我」字の見える章の考察の結果をここで一度まとめておく。

まず、郭店本には強く自分を意識した「我」が一つもあらわれないことが注目される。このことは既に郭店本の検討を行ったときにまとめたが、郭店本に見える「我」は全て発話にあらわれるものであり、『老子』の著者の一人称ではない。また、二十章のように現行本には「我」があるのに、その部分がまったく郭店本にはみられない例もあることも前述の通りである。加えて、現行本において衆人と異なる自己を強く表出している「我」のみられる章はこの二十章の他に六十七章と七十章が挙げられるが、これらの章は成立の非常に遅いものだと考えられる。なぜなら、六十七章から七十九章については、楠山春樹氏などの言うように、帛書本の章序では八十六章の後に八十章・八十一章が続き、その後これらの章が続くこと、また郭店本にこれらの章が見られないことから後に附加されたものである可能性が高いからである<sup>viii</sup>。要するに、衆人とは異なるという自己意識の強い「我」が用いられている二十章・六十七章・七十章は、もとの『老子』にはなかったと思われる。

第二に、十七章・三十七章・四十九章など、もとのテキストに何かしらの操作を施すことで、「吾」「我」の意味内容を改変してしまっているものがあつたことが注目される。これらの章はどれも、『老子』の著者が為政の道に通じた聖人であるかのように解釈しうる改変を行っていた。この点も『老子』のテキストの変遷を考える上で重要である。

これ以外の章にあらわれた「吾」「我」は、『老子』のテキストの変遷に関しては特に見るべき点はない。『老子』のテキスト史を考える上では、ここに挙げた二点、すなわち俗世の人々とは異なるという自己意識を強く持つ「我」の含まれる章は全て後出のものであるといえることと、『老子』の原テキストが現行本の形に編纂されていく過程において何らかの形で手を加えられ、その編纂の中で『老子』の著者である老子を聖人と無理に結びつけるような、原『老子』の意図を曲げる改竄も行われていたことの二点が

注目される。このことを踏まえて、第四章では実際に『老子』のテキストの変遷をたどってみることとする。

#### 第四章 「吾」「我」字からみる『老子』形成に関する一考察

第三章の考察から、「衆人とは異なるという自己意識を強く持つ「我」の含まれる句及び章が全て後出のものであったこと」、そして「『老子』の原テキストが現行本の形に編纂されていく過程において『老子』の著者である老子を理想的な為政者と結びつけるような改竄が行われていたこと」の二点が結果として得られた。この二点を土台として、郭店本『老子』のテキストが一体いつ頃に成立したもので、どのような性質を持つものなのか、またどのような時代背景にあって改変を受けたのかについて詳しくみていきたい。

まず、第一の「衆人とは異なるという自己意識を強く持つ「我」の含まれる句及び章が後出のものである」という点であるが、この問題を考察していくにあたり、まず老子の思想の淵源はどこにあるのかについて考えてみようと思う。『史記』老子韓非列伝には老子の候補として、周の守蔵室の史の李耳、楚人の老萊子、周の太史儋の三人が挙げられている。ここで、老子の思想の特色が形而上的「道」の思想及びそれに伴う宇宙生成論であることを考えると、李耳と太史儋の伝承に重複して見える「周室の史」というキーワードが注意を引く。この点について、高木智見氏の説が非常に参考になるので、以下にその概要を記す<sup>ix</sup>。すなわち、当時の人々の最大の関心は一家や国家の存続であり、史官は過去の歴史の蓄積や、天象と人象の関連をそれから読み解き、未来を予言・予知することで大なる「天道」の力を見出し、それに基づく統治や処世の重要性を強調したが、『老子』とはその「天道」をも超えた「道」を見出した人物、李耳が道の立場に立って従来のブレイン達による教訓や警句の類をまとめたものであるとするものである。この説は、『老子』思想の特色である「道」の思想を老子という人物の来歴と合わせて考える上で、非常に説得力がある。また、浅野氏もその著『黄老道の成立と展開』において似たような見解を示してい

る<sup>x</sup>。すなわち、中原諸国において培われた占星術主体の瞽史の天道思想が、計然を通じて范蠡に伝えられ、中原から隔絶された越の地域性及び楚を中心とする「南方之強」の気風と融合したものが老子思想の土台になっているとするのである。つまり、これらの説によれば、『老子』に見られる「道」の思想の淵源は史官にあり、彼らは歴史に鑑み、天象を読み取り、「天道」なるものをその豊富な知識から導き出した。そしてそれを一步進めたものが『老子』の核となる「道」の思想なのである。このような視点から、ひるがえって『老子』書にあらわれる「吾」「我」を考えると、度々見られた「吾是以知」「吾何以知」のような句が、天道の観察者たる老子の人物像とぴったり合致する。「吾」「我」を含む計十九章のうち、「知」「見」「観」といった判断を表す語と「吾」がともに用いられている章は八章にのぼる。その上、残る十一章のうち十三章と十七章の二章は「吾」「我」が一人称で用いられておらず、二十章、三十七章、四十九章は第三章で考察したとおり、もとは「吾」「我」が無かったと思われる章である。更に、六十七章・六十九章・七十章・七十四章の四章は前述のように後出の章だと思われる。また、郭店本のみを考えれば、「我」は全て発話の文に現れ、「吾」字は全て「知」とのセットであらわれている。これらのことを考えれば、「吾」は本来「知」「観」のような判断を示す言葉と共に使われるのが古い形であり、世界の観察者たる老子の姿を伝えるものであるように思える。「道」の観察者である老子はあくまで天象・歴史などを客観的に観測することからその法則を導き出すのであり、そこから出てくるのはむしろ柔弱を尊ぶ処世術であって、強い自我を押し出していくものでは到底ない。

次に、第二の「『老子』の原テキストが現行本の形に編纂されていく過程において『老子』の著者である老子を理想的な為政者と結びつけるような改竄が行われていたこと」という点について考えてみる。楠山氏は『老子の人と思想』において、老子を周の太史儋であるとする説は、黄老学派のたてた説だと述べている<sup>xi</sup>。ともすれば隠者的な印象のつきまとう老子像を払拭し、現実政治の世界に関与する老子像を形成する必要があったからである。『史記』によれば稷下の学の頃には黄老の術と呼ばれるものが既

にあったようだが、浅野氏はこの記述は信憑性に乏しいとしており、この稷下の学の時代に諸思想を吸収した范蠡型思想が黄帝に仮託して黄帝書を成立させたのがおよそ前三世紀前半であったとする<sup>xii</sup>。ここで注目されるのは、史官の天道思想を淵源とする『老子』の思想が、他学派との論争に触発されてその姿を変えていくことである。黄老の学は老子のそれとは異なり、その政治的側面が強く押し出されている。このような変化に対応すべく、老子像の再構築が当時要請されていたのであろう。楠山氏の説は、そのことを的確に捉えている。では、その取り組みはどのように行われていったのだろうか。一つには、楠山氏の言うように老子に関する伝承に操作を加えることである。そしてもう一つ考え得るのはその著作に操作を加えることである。ここで重要なのは『老子』のテキストにその著者として「老子」の名が冠せられるようになったのは一体いつごろのことかということである。澤田多喜男氏は『老子』の書名の成立について、「前漢文帝期頃までは『徳篇』《道篇》としてあった書籍が、景帝期頃には老子という人物と結びついていたらしいこと、さらに武帝期の司馬遷の頃になるとそのことがほぼ明確になり、前漢中期には『老子』という名称の書籍としてほぼ定着したらしい」と述べている<sup>xiii</sup>。これらのことを踏まえると、『老子』のテキストは二度の大幅な加筆・修正の時期を経験しているようである。まず、その第一は、郭店本の頃の原初的な史官思想に淵源をもつ「道」の観察者たる「老子」の思想が、戦国中期に他思想に触発されて雑多な思想を派生的に生み出し、それがテキストに付け加えられていったことである。これによって、当初は現行本『老子』に匹敵する量を持たなかった原初『老子』が、現行本の量をほぼ備えるにいたったと考えて良いだろう。これが帛書本『老子』に近いテキストだと思われる。そして、この頃まだこのテキストには「老子」の名が冠せられていなかったわけだが、第二の編纂の時期を通して現行本の形を備えることとなり、ようやく『老子』という書名が定着することとなる。この際、テキストの内容や章序がもう一度見直され、修正されたのだらう。四十九章はその顕著な例で、この修正の内容からするに、当時の黄老思想の盛行と合わせて考えれば、やはりテ



キストに「老子」の名を冠するにあたって、理想的為政者の道を備えた聖人としての老子像を求めていたように思われる。

以上のことを踏まえ、最後に『老子』テキストの変遷の流れは以下のようになるだろう。

『老子』の思想の特色とされる「道」の思想及びそれに基づく柔弱謙下の処世術、宇宙生成論などの哲学は、豊富な歴史知識と天象観測に基づいた「天道」の観察をなりわいとした史官にその淵源が認められる。『老子』中において「吾」が「知」「見」「観」などの判断を示す述語とともに用いられることの多いのは、その「道」の観察者たる史官としての老子を彷彿とさせるものである。この頃にはまだ諸学派との交流はなく、郭店本『老子』に儒家批判が見られないなどとする説が持ち上がるのは、その当時の初期段階としての『老子』のテキストを多くとどめているからであろう。しかし時世の流れは、この原初老子思想が他思想と隔絶したままでいることを許さず、戦国中期に至って諸思想との交流を生むに至る。その論争の場として考えられるのは、いわゆる斉の稷下の学である。この時期を中心に、原初老子思想から派生した雑多な思想をもつテキストが大幅に追加されていったことだろう。これが『老子』テキストの第一の変化の時期である。また、ここにおいて、孔子という聖人をその始祖として持つ儒学に対抗するために、老子一派の者達はこれに勝る聖人としての老子を求める必要に迫られた。著者としての「老子」像の模索が始まるのもこの頃である。元のテキストを改竄してでも聖人老子像を作り出そうとしたことが、郭店本からのテキストの変遷から窺われる。しかし、この頃既に隠者としての老子像が世に行われており、自己を強調する「我」によって表現される老子像はそれによって作られたもののように思われる。一方では聖人としての老子を求める向きもあり、理性的為政者と結び付く「吾」が増えていくこととなる。老子の一派が、政治的色合いの強い黄老学派と、形而上的思索を深めた莊子学派に別れていくことは、この老子像の分裂と軌を同じくするものであろう。こうして諸学派からの影響による雑多な思想が『老子』テキストに吸収されていき、最終的に八十一章にまとめ上げられたの

であろう。これが帛書本の原型であるように思われる。そして、これがまた前漢期の景帝の頃に黄老の学の盛行を受けて再度テキストが編纂しなおされ、「老子」の名がテキストに冠せられることとなった。これが現行本の体裁を備える『老子』である。単なる天道の観察者であった『老子』中の「吾」は、後人の意図によって無理やりその性格を歪曲せられ、結果様々な「吾」「我」が一つの人格に押し込められることとなって後世に混乱を残し、遂には歴史の流れの中にその本来の姿をくらませてしまったのである。

註

- i 浅野裕一、湯浅邦弘編『諸子百家〈再発見〉』（岩波書店 二〇〇四）三七頁
- ii 池田知久『郭店楚簡老子の新研究』（汲古書院 二〇一一）前書き 二 郭店一号墓の下葬年代—通説とそれへの批判
- iii 高倉克己「吾我篇」（『人文研究』第七号 一九五二）六七頁
- iv 鈴木直治「「我」「吾」について」（『金沢経済大学論集第二—巻 第二・三合併号』一九八七）
- v 齊藤响『全釈漢文体系 老子』（集英社 一九七九）一三四頁
- vi 池田知久『郭店楚簡老子の新研究』（汲古書院 2011）二四八頁
- vii 木村英一『老子の新研究』（創文社 一九五九）四三〇頁
- viii 楠山春樹『老子の人と思想』（汲古書院 2002）、谷中信一「郭店楚簡『老子』及び「太一生水」から見た今本『老子』の成立」（『楚地出土資料と中国古代文化』汲古書院 2002）
- ix 高木智見『先秦の社会と思想—中国文化の核心—』（創文社 二〇〇一）
- x 浅野裕一『黄老道の成立と展開』（創文社 一九九二）第一部 第十四章『老子』の成立状況
- xi 楠山春樹『老子の人と思想』（汲古書院 二〇〇二）二六頁
- xii 浅野裕一『黄老道の成立と展開』（創文社 一九九二）
- xiii 澤田多喜男『『老子』考索』（汲古書院 二〇〇五）五九頁